いとしの儚

－100DaysLove－

作：横内謙介

登場人物

鈴次郎
儚

青鬼
鬼シゲ
鬼婆
地蔵菩薩

ゾロ政
長治
中盆
勘太
権太
お銀

お鐘
お福
梅鶯
鹿紅葉

賽子姫（サイコロ姫）

妙海
三木松

助兵衛
米造
花売り
子供
殿様

プロローグ

賽の河原。
薄汚れた青鬼が一匹佇んでいる。
姿は見えないが、間もなく三途の川を渡る旅人がいるらしい。

青鬼　これが三途の川だ……向こう岸があの世よ。渡し舟は今出たとこだ。次の便までしばらくあら……
（煙草を出して）吸うか？（手を出し）売り物だよ。向こう行って閻魔サマのお裁き受けて、地獄堕ちとなりゃ、五百年のお勤めだ。
健康のために、やめた？　何いってんだ、もう死んでんだ、オメー……
地獄の沙汰も金次第だ。何が欲しい？　ナニ、博打がしてえ？　オメー博打打ちか？　趣味？　だろうな、博打打ちのツラじゃねえや。
わかるよ。いろんな奴を見てきたからな……
俺はやらねえ……船頭の鬼シゲが大の博打好きだ。奴が来たら、渡し賃でも賭けてやりな。
収支は負け越し？　だろうよ、お前さんにはツキの神様が寄って来そうな気配もねえ。お月様じゃねえ、運のツキだ。
ああいるとも。ツキの神様ってのは可愛らしいお姫様さ……そのお姫様が笑いかけりゃツキが回る。そっぽを向きゃ、ドツボだよ。見たことあるよ。その昔、その神様に滅法好かれた博打打ちがいてな……
聞きてえか？
ロクでもねえ、人でなしの話だぞ……

と青鬼が語るうちに、賭場が見えてくる。
丁半博打の風景。
物語はすべて、この賽の河原で綴られる。

青鬼

そいつの名は件鈴次郎(くだんすずじろう)、親兄弟、妻子は元より心を許した幼なじみの一人も持たねえ、天涯孤独の流れ者だ。手癖は悪ィし、意地も汚え人間のクズよ。だがこのクズがツキの神様にだけは気に入られ、物心ついてこの方、博打で負けたことがなかった……

そして物語が始まる。

一

ムササビ一家の賭場。
盆ゴザを囲んで鈴次郎と数人の遊び客たち。
（女郎屋お鐘、女郎屋で働くオカマの三木松、生臭坊主の妙海等）
壺振りは、紅百合お銀。

お銀　入ります！

賭場の隅に鈴を持ったお姫様（ツキの神様・賽子姫）がいるが、その姿は人間たちには見えない。
姫は壺が振られる度に鈴を鳴らす。

中盆（賭場の世話役）　さあ、張った！
賽子姫　（鈴を鳴らす）
鈴次郎　（握り飯など頬張りつつ）もうイッちょ、半だ！
かかってきやがれ、このヤロウ、ぶっ殺してやる！

客の中に負け続けで熱くなっている旦那がいる。

熱い旦那　ちきしょう、そんなに半ばっかり続いてたまるかよ！　今度こそ、丁だ！
鈴次郎　（下品に笑う）
お銀　（鈴次郎に）お客人、米ツブ飛ばさないどくれ。
鈴次郎　悪い悪い。でも、いい女だね。別の壺、振るとこも見てみてえや。へへへ……
中盆　勝負。
お銀　イチニの半！
鈴次郎　よっしゃ、頂きっ！　愛してるぜっ！
お鐘　どうなってんのよ、半の目ばかり十回目だよ……

賽子姫　（鈴を鳴らして喜んでいる）
鈴次郎　また一人勝ちだよ。いい町だ。みんな、博打が弱くって。住みついちゃおうかな。（と下品に笑う）
熱い旦那　ええ、次だ、次！　早く振れ！
鈴次郎　さあ来い！　ぶっ殺してやる！
お銀　入ります。（と振る）
中盆　さあどうぞ……
賽子姫　（鈴を鳴らす）
鈴次郎　もう飽きたよ、勝つの……半に一両！
熱い旦那　半だと！　ふざけんなよ……丁半博打の出目は二つ。丁と半とが替わり番つに来るのが基本だ。普通来るだろ、そろそろ丁が……勝負でエ、丁に一両！
中盆　他ないか……
お鐘　ヤダよ、小判が飛んでるよ……もうヤメヤメ。
三木松　アタイも見物。
妙海　拙僧もご遠慮申す。

他の客たちも引く。

中盆　勝負。
お銀　ゴロクの半！
熱い旦那　イカサマだ！

ムササビ一家の親分・長治が凄んで、

長治　お客人、今の言葉は聞き捨てならねえ。ムササビ一家の盆に注文をつけなさんのかい？
熱い旦那　いや、何でもねえ……（と唸る）
青鬼　（語りで）この旦那はわかってねえ。ウケ目に天井なし、クスブリに底なしってな。ツキもドツボも続く時はとことん続くもんなんだ。もうやめときな。顔が真っ赤だぜ……
鈴次郎　もう一つ勝ったらやめよ。ああ、今日も退屈な博

打だった。

熱い旦那　こんにゃろう……

お銀　入ります。

賽子姫　（鈴を鳴らす）

鈴次郎　半に一両！

熱い旦那　丁に一両！　これで有り金、全部でぇ！

青鬼　有り金全部は地獄への一本道だよ。

中盆　勝負。

お銀　サブロクの半！

賽子姫　（大喜び）

熱い旦那　……（震えている）

鈴次郎　そんじゃ、アバヨ。下手クソども。

その時、賭場に稲妻が走る。疾風が巻き起こり、熱い旦那がその正体を現す。

それは実は赤鬼（鬼シゲ）だった。

賭場の人々、大騒ぎ。

皆、逃げようとするが、

鬼シゲ　待てぇ！

一同　！

鬼シゲ　博打だ！　博打を続けろィ！　さもねえと殺して食うぞ！

一同　ひええ……

鈴次郎は逃げようとしているが、

鬼シゲ　待てェ、若造！　お前はゼッタイ帰さねえ！

鈴次郎　何だよ、おい、助けてくれェ……

鬼シゲは鈴次郎に掴みかかる。その時、現れる無頼の博徒。千里眼のゾロ政だ。

ゾロ政　待った、待った。お待ちなせい。
鬼シゲ　何だ！
ゾロ政　縦横七分のサイコロに命を賭ける博打場で、たとえ鬼でも、旦那さん、腕づくたァ大人気ねえよ。
鈴次郎　おメエは……
鬼シゲ　誰だ！
ゾロ政　名乗るもケチな流れ者ながら、その筋ではちったあ知られた、ゾロ政ってえ、博打打ちでござんす。
長治　どっかで見た顔だと思った。請け負う勝負は必ず勝つ千里眼のゾロ政か！
三木松　何で、そんな博打打ちが、ここに？
ゾロ政　なに、ちょいと通りがかりでございやす。しかしそこの兄さんも、ちと下品過ぎるぜ。裏街道行く博徒にも礼儀はある。まして相手は素人さん。汚え、勝ち方すンんじゃねえ。
鈴次郎　ケッ、一つ目小僧！
ゾロ政　オウ兄さん、儲けの半分置いていきな。迷惑料だ。
鈴次郎　何が迷惑だ！　こいつらが勝手に負けただけだろ！
鬼シゲ　負けてねえ、これからだ！
ゾロ政　こいつは玄人だよ。
鬼シゲ　俺だって、地獄じゃ知られた博打の鬼だ。取り戻すまでは帰さねえ！　邪魔すんねえ！
ゾロ政　鬼の旦那もチッと頭を冷やして……
鬼シゲ　うるせえ、お前が壺振れ！　殺して食うぞ！
鈴次郎　わかったよ。そんじゃ、この金、倍にして、二十両で勝負してやる。お前も二十出せ。ぶっ殺してやる！
賽子姫　（嬉しそうに鈴を鳴らす）
鬼シゲ　受けて立とうじゃねえか。オウ、誰か二十両貸せ。
一同　……
鬼シゲ　今さっき、有り金全部といっただろ！　スッカラカンなんだよ！
ゾロ政　どう見てもクスブリのどん底だ。そんな大金誰が

貸すかよ。

鬼シゲ　うるせえ、貸せ！

一同　（必死に逃げる）

鈴次郎　金でなくても構わねえよ。あるだろ、鬼のお宝が。

鬼シゲ　女……女でどうだ！

鈴次郎　女？

鬼シゲ　そうだ女だ。負けたら、世界一の女をお前にやる。

それでどうだ？

鈴次郎　そんなモン、持ってるのかよ？

鬼シゲ　この世に二人といねえ絶品だ。ウソじゃねえ。

鈴次郎　ちょうどチンポコが腹減らして、泣きだしていたとこだ。それ頂こ。

ゾロ政　人間も鬼も、博打打ちは大バカ者だぜ！　死ぬまでやってろ。（と振る）

鈴次郎　先に張れ。

鬼シゲ　オメーが先だ……いや待て、待て！　俺が先だ……いや、やっぱり、お前やれ。

賽子姫　（鈴を鳴らす）

鈴次郎　半。

鬼シゲ　なにっ……振り手が替わったんだぞ、まさか、そんな……いや俺も半だ。半！　半！

賽子姫　（鈴を鳴らす）

鈴次郎　ならば俺は丁でいい。

鬼シゲ　え……

ゾロ政　勝負……

鬼シゲ　待てっ！　うん……（混乱して）丁だよ。丁だ。やっぱりそうだ。もう変えねえ。丁だ、丁！

賽子姫　（鈴を鳴らす）

鈴次郎　半。

ゾロ政　イチロクの半。

鬼シゲ　（悶絶する）

賽子姫、飛び上がって喜んでいる。

その賽子姫と、鈴次郎、ゾロ政を残して、一同は去る。

ゾロ政　久しぶりだな、鈴次郎……あの時、天下分け目の代打ちで、お前に負けて大親分の怒りを買い、ゾロ目の政が片目にされて、以来、こうして流離い続けだ。

鈴次郎　知ったことかよ。負けたオメエが悪いんだ！　空いた片目の穴ボコにオカマのマラでもはめて貰え。

ゾロ政　相変わらず、最低の男だな……オメエみたいな、クズ野郎に負けたかと思うと、俺はつくづく自分が情けねえよ。なくした目より、心が痛エぜ。

鈴次郎　この世の中、負けた奴がクズなんだよ。失せろ、負け犬！

ゾロ政　この恩返しがしてえんだ、人でなし。どっちみち長生きなんか出来ねえだろうが、つまんねえくたばり方すんじゃねえぞ。オメエを殺るのは、このゾロ政だ。覚えとけ！

ゾロ政も去る。

鈴次郎も去り、賽子姫ひとり。

青鬼　あの鈴の音は目を教えてくれる。わかるんだ、あの音に耳を済ませば……見えねえはずのサイコロの目が見えてくる。でもそれは聞こうとすれば、誰の耳にも聞こえるんだよ……

ところが普通は聞こえねえ。雑念が多すぎら。勝負の最中に、昨日のこととか、明日のこととか、くよくよしたり、ハラハラしたりな……そういうモノにとらわれると、鈴の音はもう届かねえ。必要なのは、ただ今、この勝負を取りたい。その一念よ。後は全部、妨げだ。本気で勝ちたきゃ、捨てられるモノは何もかも捨てるこった。家族はもちろん、名も財産も、思い出もな。

いいか、そもそもサイコロなんてただの石だぜ。石がた

だ成り行きで転がってるだけなんだ。だが、人間って奴はそんなものにも因果を求めたがっちまう。半の目が続いたから、そろそろ丁が来るだろうなんて。そりゃ人間の考えだ。石ころが前に出した目を覚えてると思うかよ。サイコロには思い出も心もねえんだぜ。だからそれを読もうとするなら、こっちだって思い出や心なんか持ってちゃいけねえ。まして夢だの望みだの、とんでもねえや……

いつの間にか、そこは墓場。

青鬼　ろくでなしは女を貰った。それは鬼が、墓場の死体を集めてこしらえる女だった。

二

墓場。
鬼シゲと鈴次郎。
鈴次郎は手の中でサイコロを転がしている。

鈴次郎　本当にいい女なんだろうな。
鬼シゲ　ああ、鬼に二言はねえ。さっき聞いた、お前さんのお好み通りにこしらえるんだ。（覚え書きを見て）唇がぽっちゃりとして。首が細くて色白で、何よりパイオツ。（笑う）
鈴次郎　何がおかしい。笑うな！
鬼シゲ　まあ、見てな……何してんだ？
鈴次郎　サイコロだ。
鬼シゲ　のべつそうしてイジってんのか……
鈴次郎　知らねえうちに手が動か。
鬼シゲ　なるほど勝てねえはずだよな……しかし強えな。俺は悔しいの通り越して、呆れたよ……どんな生き方して来たんだ。親兄弟は？
鈴次郎　うるせえや、ぶっ殺すぞ。
鬼シゲ　人間にしとくのは惜しいぜ。

そこに鬼婆が現れる。

鬼婆　シゲちゃん、こっち。
鬼シゲ　手間取らせたな、オババ。
鬼婆　兄さんか……任せときな、デカイ乳。（と笑う）
鈴次郎　笑うなって言ってんだろ！　俺は笑われるのが嫌えなんだ！
鬼婆　これから見ることは他言無用だ。いいね？

すると闇の中から、たくさんの死体がフラフラと漂うように現れ出てくる。

鈴次郎　オウ、何だァ、これ！
鬼婆　掘り起こした死体だよ、部品にするのさ。
鈴次郎　ふざけんなよォ！
鬼婆　厳選素材さ。中でも、本日の特選品。（鬼婆の手の中に光る玉）いいモノが手に入った。ついさっき、生まれてたちまち死んじまった、赤子の魂だ。
鬼シゲ　ほう。
鬼婆　とれたてだから新鮮だ。何より、ゼンゼン汚れてないから、きっといい子になる。さてと……

と鬼婆が杖を振ると死体たちが踊るように円を描いて回り始める。
鬼婆はその円の中に光る魂を持って入る。
やがてその死体の輪はまばゆい光に包まれる。
そしてその中央に美しい女が立ち現れる。

鈴次郎　！

死体たちは不思議な光とともに消え、女と鬼婆だけがそこに残る。

鬼シゲ　どうでえ、おい、いい女じゃねえか……

女は眠るように目を閉じている。

鈴次郎　生きてるのか？
鬼婆　たった今、生き始めた。
鬼シゲ　兄さんのもんだ。
鈴次郎　……
鬼シゲ　ほら、見ろ、あの乳……（と鈴次郎の股間をまさぐり）へへへへ……

鈴次郎　へへへ……
鬼シゲ　好み通りの女なんか、そう手に入るもんじゃねえぞ。大事にしろ。

鈴次郎、おそるおそる近付き、手を触れようとすると、

鬼婆　ただし、百日は我慢だよ。
鈴次郎　え？
鬼婆　今日この時からキッカリ百日。それまでは決して抱いちゃいけない。カラダと魂がくっつくのに、キッカリ百日かかるんだ。
鈴次郎　抱くとどうなるんだ？
鬼婆　水になって流れちまう。
鬼シゲ　ナニ百日の辛抱だ。マラさえぶっ込まなきゃ、イジクルぐれえは構わねンだろ？
鬼婆　赤子のように可愛がるのは構わないさ。でも女として抱くのは百日後だ。もっとも、大人のなりはしてても中身は当分、幼子だ。百日後を楽しみに、じっくり育てな。ほれ。

と杖を振ると、魔力の支えを失い、女はその場に崩れ落ちる。
思わず抱き止める鈴次郎。

鈴次郎　わあ、こいつ！　冷てエぞ！
鬼婆　当たり前だよ。ついさっきまで死体だったんだ。兄さんが抱いて暖めておやり。ほうら、儚、旦那様だよ。
鈴次郎　はかな？
鬼婆　人の夢、儚し、のハカナ。

儚は言葉にならぬ赤子のような声を出し、鈴次郎に抱きつき、甘える。

鈴次郎　赤ん坊じゃねえか……

鬼婆　ダメだよ、しっかり抱いてやらなきゃ。赤ん坊の時、しっかり抱いて貰えなかった子はひねくれて育っちまうよ。なあに、二日もすれば這い出すし、五日もすれば言葉も覚えて歩き出す。

鈴次郎　ふざけんな、こんなもの背負い込んでられるか。いらねえよ、こんなもの！

と儚をうち捨てて、鈴次郎は行こうとする。がその時、儚は赤子の声で泣く。

鈴次郎　……

行けない。
鈴次郎、儚の元に戻る。
儚はまた鈴次郎に縋り付く。
鬼シゲと鬼婆、笑いながら去る。

鈴次郎　おい、待て。どうしろっていうんでえ……うるせえよ、泣くんじゃねえ。ぶっ殺すぞ！

儚　（泣く）

鈴次郎　おい、よしよし……泣くな、泣くな。なあ、いい子だからよォ……泣くなよ。なあ、儚……

鈴次郎、仕方なくすがる儚を抱き上げる。
そして抱いたまま、墓場を後にする。

三

賽の河原。
子供（死人）が石を積んでいる。

子供　一つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため……
青鬼　いけねえ、話し込んで油断した……

子供は積み上げた石の前に座り、手を合わせて祈ろうとする。
青鬼は慌てて、そこに駆けつけ、積み上げた石を蹴り倒す。
火のように泣き出す子供。

青鬼　ざまあみやがれ！　最初からやり直せ！　ははは！

子供は逃げ出してゆく。

青鬼　これが俺の仕事だ。この賽の河原では、親より先に死んだ親不孝のガキどもが、娑婆に残した親のため供養の塔を建てようとする。それをぶち壊しにしてやんだ。積んでも積んでも、元の黙阿弥。惨い？　だから鬼だ。

そう語るうち、鈴次郎と儚の様子が闇に浮かぶ。
鈴次郎が赤ん坊のような儚を抱き、サジで粥を食べさせている。

青鬼　博打打ちは仕方なく、儚を宿に連れ帰った。最初の十日はこの大きな赤子の世話に明け暮れた。でも鬼婆のいう通り、二十日もすると、儚はだいぶ人らしくなってきた……

二人の姿、闇に消える。

四

通り。
女郎屋の女将・お鐘と宿屋の女将・お福。それに奉公人の三木松。

お福　それじゃ、あの流れ者が連れて来たのは、鬼から貰った女なのかい？　いるよ、うちの宿に、かれこれ二十日……
お鐘　オツムの弱い娘なんだろ？
お福　そうなのよ。ベッピンだけど、ちょいとね……
お鐘　鬼のことさ。大方どっかでさらって来た娘なんだよ。鬼に好き放題凌辱されて、おかしくなってんだよ……
三木松　イヤだぁ……
お福　気味が悪いねえ……だいたいあの流れ者、乱暴で下品だし。早いとこ消えて欲しいよ……
お鐘　あの女が来て以来、うちにもとんと寄り付けやしないし。前は毎日来て、三人は買ってたのに。
三木松　一日に三回しないと病気になるって言ってたのにね……

そこに鈴次郎と儚が来る。
儚は子供のように無邪気に、鈴次郎にまとわりついている。
花売りが通る。

鈴次郎　おい、あんまり……ベタベタ寄るな……
儚　あれは何だよ？
鈴次郎　あれは花だ。
儚　何てハナ？
鈴次郎　知らねえよ……
儚　知りてえよ、このヤロウ。
鈴次郎　知ってどうすんだ。花なんて、何の役にも立たね

えもの……あれはクソ花だ。クソ花にチンポコ草だ。
名前にはてえげえ、クソがつくんだな。
夢　ああそうだ。何もかもクソったれだ。
鈴次郎　んじゃよォ、あのトリは？
夢　金玉鳥。
鈴次郎　クソッタレ……金玉鳥！
夢　（笑う）このバカ！
鈴次郎　（笑い返すが、いきなり鈴次郎の顔を摘んでイタズラし）クソブタガエル！
夢　よせ、この野郎！
鈴次郎　（無邪気に笑う）
夢　そんなことしやがるとくすぐるぞ。（と夢をくすぐる）
鈴次郎　（笑い転げて）イヤだよ、やめろよ、こんちくしょう！
夢　ははははは！

お鐘たち、呆れてみている。

鈴次郎　何見てやがんだ！　見せ物じゃねえ！
お鐘　お姿が見えないと思ったら、こんなべっぴんさんをね……（夢に）ごきげんよう。
夢　ブツ殺すぞ。（とにっこり笑う）
鈴次郎　あっち行け！

と鈴次郎はお鐘たちを蹴散らす。

夢　ねえ、鈴さあん……（と抱きつく）
鈴次郎　だから、抱きつくなって……お前、中身はガキでも、カラダは大人なんだからよ……
夢　鈴、鈴！
鈴次郎　こすりつけてくんじゃねえ！　そんなことしたら、おっ立っちまうだろ。
夢　パイオツ、いじくれよ。

鈴次郎　オウ……頼むから止めてくれ。もうやめろ！
儚　（泣く）
鈴次郎　泣くな！　わかったからよォ……怒ってねえよ。
なあ、ハカちゃん……いい子だからよォ。
儚　だって、ハカちゃん、キモチいんだよ。
鈴次郎　気持ちいいのかよ……どうすんだ、そんなとこだけ一人前で！
儚　……
鈴次郎　何だ、その顔は……テメエ、もう抱いちまうぞ！
儚　うん抱っこ。
鈴次郎　（股間を押さえ）ああ、もうダメだ。俺、病気になる……行くぞ、もう！

と儚の手を取り歩き出す。

五

お鐘の女郎屋。
ひらひらと舞う遊女、梅鶯と鹿紅葉。
店に来た鈴次郎と傳。

三木松　お客様、お上がり！
梅鶯・鹿紅葉　旦さん、おこし！

と飛びつこうするが、二人とも逃げる。

鈴次郎　おうコラ、待て！　逃げ出すことはねえだろ！

お鐘、現れる。

お鐘　あら、べっぴんさんもご一緒で……
鈴次郎　急ぎで頼ま。こいつらでいいや。
お鐘　そんなあなた、立ち食いソバじゃあるまいし……
鈴次郎　立ち食いだ。今直ぐさせろ！
梅鶯・鹿紅葉　（震えている）
お鐘　どうしたんだい、お前たち？
三木松　この旦那、無茶をするから……
梅鶯　噛みつくんだよ、そこら中！
鹿紅葉　お乳がちぎれる！
お鐘　お客様だ、我慢をおし！
梅鶯　こいつはイヤ！
鹿紅葉　アチキも二度とイヤでありんす！
鈴次郎　（笑って）オオ嫌がれ、嫌がれ。俺は嫌われれば嫌われるほど燃えるんだ……（金を投げつけ）オラ、女将、二人分だ。ぶっ殺してやる！
お鐘　お有り難うございます！
鈴次郎　おう、オカマ！
三木松　はい！

鈴次郎　カマと見込んで頼みがある。こいつのこと見ててくれ。（と銭を投げる）良い子にして、このケツの穴と遊んでな。

儚　イヤだ。オレも行く。

鈴次郎　オメエはダメだ！　さ、やるぜ。

お鐘　何やってンだよ、お勤めお勤め！

と鈴次郎とお鐘、嫌がる遊女たちを引きずるようにして襖の向こうに連れて行く。

儚　オウ、ケツのアナ。

三木松　よしなよ。そんな綺麗な顔して。

儚　鈴さんとこ、行く。

三木松　（止めて）ダメだよ。

儚　鈴さんといてンだよ。クソったれ。

お鐘が出てくる。

お鐘　何だ、こら、獣だね。どこの娘だ？　親は？

儚　オヤ？

お鐘　鬼の腹から生まれてきたのか？　おとっつぁんと、おっかさんはいないのか？

儚　ソレ何だ？　クソばばあ。

お鐘　（叩いて）器量だけなら二十両で買ってやるけど、キチガイじゃしょうがないよ。キチガイ。

とお鐘は去る。

儚　オヤって何だよ？

三木松　あんたをこの世に生んでくれた人だよ。人間ならいるんだよ。誰にだって親ってもんが。

気が付けば、坊主の妙海が立っている。

妙海　これが噂の鬼娘か。いかなる不幸に弄ばれたかは存ぜぬが、哀れなことじゃ。
三木松　和尚様……
妙海　コレ、娘御、お念仏を唱えなされ。さすれば、そなたも救われよう。
儚　すくわれる？
妙海　いいことがあるということじゃ。
儚　なあ、オッサン。
妙海　？
儚　アタイはバカか？
妙海　こう手を合わせるのじゃ。そして唱える。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……ささ、やってみよ。
儚　なむあみ……
三木松　ナムアミダブツ。
儚　ナムアミダブツ……
妙海　ようでけた。上出来じゃ。
儚　ナムアミダブツ、ナムアミダブツ！
妙海　バカではない。賢い子じゃ。その調子で続ければ、オツムの具合も良うなろう。
三木松　良かったね、和尚様にお礼をおいい。
儚　おレイ？
三木松　お礼よ。ありがとうございました。
儚　？
三木松　いいことをして貰ったら、そういうのさ。
妙海　よいよい。少しずつじゃ。
三木松　でも和尚様、今日はどうして？
妙海　なに近くを通りかかったで、どうしておろうかと、ナ……（と三木松の手を握る）
三木松　（握り返して）仕事中です……
妙海　さようか……
三木松　けど、立ち食いなら……
妙海　ウム、立ち食いっ！

三木松　　儚はここでお念仏唱えておいで。
妙海　　それじゃ三木松。
三木松　　和尚様。
妙海　　手と手を合わせて。
三木松　　幸せ……
妙海　　あな、ありがたや。南無阿弥陀仏……

と手に手を取り合い座敷を出て行く。
寺の鐘が一つ鳴り、襖の向こうから遊女たちの喘ぎ声。
儚、思わず襖を開けて、その向こう側を覗き見る。

儚　　……

そこに好色商人の助兵衛が通りかかる。

助兵衛　　何してるのかな？　何とまあ色っぽい花魁だ……
儚　　ジジイ、これは何だ？
助兵衛　　（と覗き）わからない、これが？　では生娘か……
儚　　鈴さんが女をイジメてんぜ。
助兵衛　　いやいや、これは可愛がってんのさ。
儚　　だってヘンだぜ。犬コロみてえな声だして。
助兵衛　　それほど気持ちがいいんだよ。よく見てみな。
儚　　可愛がっている？
助兵衛　　そうじゃ。
儚　　儚は？
助兵衛　　は？
儚　　儚のことも可愛がれよ。ふざけんじゃねえよ。
助兵衛　　……
儚　　オレもしてもらう……（と行こうとするが）
助兵衛　　まてまて。

儚　だってオレも可愛がってもらいてえよ。ダメなのかよ？　オレがバカだからか？
助兵衛　そもそもお前さん、知らないんだろ？
儚　やっぱり、アタイが何も知らねえからか。ナムアミダブツ。（と拝む）
助兵衛　？
儚　アタイもできるようになりてえよ！
助兵衛　それは感心なる心がけだが。
儚　なあ、ジジイ。
助兵衛　？
儚　教えろ。
助兵衛　へ！
儚　知りてえんだよ。
助兵衛　おぼこ娘が。チャーンス。
儚　だって、オレが知らねえから、鈴さん可愛がってくンねえんだろ！　オレ、バカだからよォ。だから教えろよ。ナムアミダブツ。
助兵衛　拝まれてはしょうがない。よろしい教えて進ぜよう。どれ……（と抱いて愛撫する）
儚　うわぁ……
助兵衛　何たる柔肌！

と助兵衛が儚のカラダを貪るように愛撫すると、儚は歓びの声を上げ始める。
が、その声は一気に高まり、たちまち女郎屋中に響き渡る。
驚いた鈴次郎がふんどし姿で飛び出してくる。

鈴次郎　どうしたァ！（助兵衛を見て）何だ、テメエ！
助兵衛　いや、私はただ……
鈴次郎　何しやがんだ、このクソ爺ィ！

と助兵衛を儚から引き剥がし、力任せに殴りつける。
お鐘や遊女、男衆も飛び出して来て、鈴次郎を止める。

お鐘　これはいったい何事だよ！
鈴次郎　どうもこうもあるか！　この爺ィが人の女に手ェ出しやがったんだ！　ぶっ殺してやる！

男衆たち、必死に止める。

助兵衛　そいつから誘って来たんだ。
鈴次郎　何だァ！
助兵衛　ウソじゃねえよ。その女に聞いてくれ……
お鐘　あんたから誘ったのかい？
儚　（頷く）
鈴次郎　儚……
助兵衛　教えてくれと拝んだよな。
儚　そうだよ。
助兵衛　ほうら、みろ！

すると鈴次郎は今度は儚を殴りつける。

鈴次郎　ふざけんな！　そらいってェ、どういうことだ！

と儚を痛めつける。
男衆たち、再び止める。

鈴次郎　この二十日、俺がどんだけ、テメエの世話焼いてやったと思ってんだ。それをテメエは……人の気も知らねえで、この薄ら馬鹿の淫売が！
儚　……
鈴次郎　どういう了見だ！　ナニをどうすりゃ、こんな爺

ィを誘うことになるんでぇ！

儚　だってよォ……

鈴次郎　だって何だ！

儚　アタイも可愛がってもらいてンだよ。

鈴次郎　何だあ？

儚　アタイのことも可愛がれよ。

鈴次郎　……

儚　鈴さんに可愛がってもらいてえよ……

と儚は鈴次郎に抱きついて泣く。

二人の姿はそのまま影のようになり、場面は賽の河原。

鬼シゲが来る。

鬼シゲ　何してんだ。また、あの話か？

青鬼　聞きてえっていうからよ……

鬼シゲ　話してえんだろ？

青鬼　違ワ、馬鹿野郎……博打がしてェんだと。

鬼シゲ　（見えぬ旅人に）おう、そうか。そんじゃ、チンチロリンでもやるか。

とドンブリとサイコロを懐から出す。

青鬼　早いうちに抱いて、水にしちまやよかったんだ……

鬼シゲがサイコロを投げると、その音が河原に響く。

六

女郎屋の座敷。
鈴次郎と儚。

鈴次郎　わかったろ。抱きたくても、抱けねえ理由が……
あときっかり七十七日だ。
儚　アタイは鬼かよ？　人間じゃねえのかよ？
鈴次郎　カラダも魂も人間のものだ。ことに魂は何も知らねえ赤子のだ。
儚　オヤは誰だよ？
鈴次郎　……
儚　人間ならいンだろ、オヤってもんが！　ふさけんなよ、ぶっ殺すぞ。人間になりてえよ……

と儚は泣く。

鈴次郎　親のいねえ人間なんて、この世にはゴマンといらあ。俺だって親父の名も知らねえし、お袋は俺を生んですぐ死んでら。

儚はそれでも泣きやまない。すると鈴次郎は儚に酒をかけ、

鈴次郎　泣くんじゃねえっていってんだろ！
儚　……
鈴次郎　しょうがねえだろ、そんな風に生まれてきちまったんだから！　定めと思って諦めろ！　それでもイヤなら死んじめえ。死にてえか！　じゃ俺が殺してやる。今ここで抱いて、水にしてやる。来やがれ！

と儚を押し倒して、抱こうとする。
儚は必死に逃げて、

儚　イヤだよ、水になんかなりたくねえよ！　イヤだよぅ……

鈴次郎　なら諦めろ……この世にはどうにもならねえことがあンだ！　バカヤロウ！

すると襖の向こうからオカマの泣き声。

鈴次郎　誰だ！

三木松と妙海が現れる。

三木松　謝ろうと思ってさ。アタシがこの子をちゃんと見てなかったばっかりに……

鈴次郎　テメエら、今の話を……

妙海　聞きました。したが他言は致さぬ。それよりも、拙僧は今の話に胸を打たれ申した……

鈴次郎　……

妙海　どうじゃ、鈴次郎殿、この娘、わしに預けぬか……

鈴次郎　なに？

妙海　わしがさまざま教えを施し、人間としてやろう。

儚　人間！

妙海　さよう。人間となるのじゃ。

儚　オレがなれるのか！

妙海　なれる。

儚　……

妙海　よいか、人から生まれしモノすべてが、人間に育つわけではござらぬ。育ち方を間違えば、たとえ人の腹から出ようと醜き鬼にも獣にもなる、それが人間と言うものじゃ。その逆もまた真なり。たとえ鬼でも獣でも、育ち次第で人間になることは出来る。しからば、何をなさば人間となるか？　コレ、すなわち教育を受けることじゃ。

儚　……

妙海　人の何たるか？　この世とは何か？　古今東西の知恵と知識を広く習い覚えることじゃ。しこうして、人の情けを知り、考える知恵と物思う心を持たば娘も必ず人間となろう。拙僧が手ほどきをして進ぜよう。

鈴次郎　馬鹿な……

妙海　ご安心召され。わしはホモじゃ。（と三木松の手を握る）むろん読み書きソロバンだけでなく、礼儀作法に唄に舞い、夜の技まで教えるぞ……夜の技は三木松が秘技を伝授する。

三木松　アタシが？

妙海　三木松は男の喜ばせ方を、それはそれはよう知っておる。目出度く百日目を迎えし時の楽しみに加えるがよかろう。どうじゃ、これをセットで二十両。安いモノとは思わぬか？

鈴次郎　商売かよ！

妙海　チといりようでな。大僧正の名を貰うのに、百両の金を収めねばならぬ。

鈴次郎　生臭め！

妙海　したが心は真実じゃ。この娘の、人間になりたいという言葉に涙が溢れた。人として生まれながら、人の道を外れるこの世のバカどもに聞かせてやりたい。

三木松　ねえ旦那、アタシからもお願いしますよ。この子を幸せにしてあげて。旦那だって、この娘が賢くて良い子になった方がいいじゃないか。旦那には端金でしょ。

儚　ナムアミダブツ！

鈴次郎　やめろ、バカ！　俺は念仏と坊主がこの世で一番嫌エなんだ！

三木松　だけど、あんた、このままじゃ、この子、ロクな娘にならないよ。ありがとうも言えないんだよ。

鈴次郎　やかましい！　そんじゃまるで、俺といるのが悪いみてえじゃねえか。俺だって、こいつにゃいろいろ

教えてやってんだ。

三木松　読み書きソロバン出来るのかい？

鈴次郎　出来る訳ねえだろ。けど、俺はこうしてちゃんと生きて来たんでエ。サイコロの目だけ読んでな！

三木松　そら違うよ、旦那、子供にとって環境は何より大事。アタシだって、子供の時、おっかさんの病気で、ホモ寺に預けられさえしなければ……

妙海　おかげで立派な和尚フェチじゃ。

三木松　あんただってこの子のことが可愛いんだろ？　何より、この子は、心から人間になりたがってんだ。ねえ、儚ちゃん？　あんたからもお願いしなよ。

儚　……

鈴次郎　オウ、儚、オメエ、俺とこのクソ坊主、どっちを信じるんでエ。

妙海　私ではない。信ずるのは御仏じゃ。

鈴次郎　じゃ勝負するか！

妙海　……

鈴次郎　仏様がどれほど正しいか、ここで見せてもらおうじゃねえか。俺と勝負だ。勝てば、言う通りにしてやる。よもや負けはしねえだろ。仏様が、読み書きも出来ねえ半端者によォ。

三木松　そんなの無理だよ。あんたは鬼にも勝った男だよ。

鈴次郎　逃げるのか！　オウ、よく見ろ、儚。神だの仏だのってのは、こういうもんだ。口先ばっかり良いこと言って、いざとなったらトンズラだ。

三木松　儚ちゃんの気持ちがわかんないのかい！　このひとでなし！

妙海　よかろう、受けて立とう。

三木松　和尚様！

妙海　ここまで言われて引き下がれるか。このわしとて、宗門ではカッパギ坊主と恐れられた博打打ちじゃ。

三木松　鬼もそういって負けたのよ。

妙海　勝負じゃ！

すると鈴を鳴らしながら、賽子姫が嬉しそうに飛び出してくる。

妙海　サイコロはあるか？
鈴次郎　おう……（と探すがない）
妙海　持ってないのか？　博打打ちだろ。
鈴次郎　……
妙海　（と懐から一式取り出し）三木松、振れ。
鈴次郎　バカヤロウ……よく見てろよ。化けの皮はがしてやるからよ。
三木松　入ります。（と振る）
賽子姫　（鈴を鳴らす）

と鈴次郎は壺をじっと見つめて耳を済ます。

鈴次郎　……

間。

妙海　先、張るぞ。
鈴次郎　おい、待ってくれ……
妙海　待ったなしじゃ！
鈴次郎　違うんだ。ちょっと待ってくれ……儚、黙ってろよ。何にもいうな……音も立てンなよ……

賽子姫は必死に鈴を鳴らす。

妙海　どうした？
鈴次郎　……
賽子姫　（必死に鳴らす）
妙海　早くしろ！
鈴次郎　半……

賽子姫　（激しく鳴らす）
鈴次郎　半！
妙海　丁だ！
三木松　勝負！　ヨロクの丁。
妙海　かかか、勝ったぁ！　鈴次郎に勝ったぁ！

賽子姫は呆然として、鈴次郎を見ている。

三木松　ちょっと待ってよ。今の本当？
妙海　カッパギ坊主の実力を見たか！
三木松　実力はアタイが知ってる。これはゼッタイ、何かの間違い。
鈴次郎　へへへ……（と笑い始める）
三木松　なに？
鈴次郎　へへへへ……
三木松　アンタ、やっぱりこの子のことが可愛くて……そうだろ！
鈴次郎　ははは！
三木松　何よ、だったら最初から素直に言うこと聞けばいいじゃないか、このひねくれ者！
鈴次郎　ははは！
三木松　お礼をいいな、儚ちゃん。この人は、あんたのためにわざと負けてくれたんだよ！
儚　鈴さん、ありがとう！
鈴次郎　ははは……
儚　（抱きついて）鈴さん、大好きだ！

賽子姫、狂ったように鈴を鳴らす。
しかし鈴次郎も狂ったように笑い続ける。

七

賽の河原。
チンチロリンをしている鬼シゲと、それを見ている青鬼。

鬼シゲ　博打打ちが肌身離さず持ってたサイコロをなくして気付きもしなかった。それでもう終わってら。

青鬼の見つめる方に鈴次郎の姿。
鈴次郎は一人で壺を振っている。
側に賽子姫がいて鈴を鳴らしている。
鈴次郎は目を読む練習をしているようだ。
しかし外し続けらしく、苛立っている。
そこにお鐘とお福が来る。

お鐘　旦那ちょいと……
鈴次郎　何でエ……
お鐘　この人が困ってるんだよ。宿賃、ずいぶん貯めてンだろ？
鈴次郎　女郎屋の婆ァは関係ねえだろ！
お鐘　友達なのさ。
鈴次郎　払うっていってンだろ。
お福　払う払うって、いつ払うんだい。
鈴次郎　テメエ、俺がウソついてるってのか！
お鐘　娘を寺に預ける金はあったんだろ。
鈴次郎　やかましい。気が立ってンだ。
お福　払わないなら、出てっとくれ。
鈴次郎　（お福を掴んで）うるせえんだ！　ぶっ殺すぞ！

そこに長治と手下たちが現れる。

長治　ここはムササビ一家のシマだ、話なら俺が聞くぜ。

鈴次郎　……（お福を放す）

お鐘　それでね、旦那。あんたのツケはうちが代わりに払っから。

鈴次郎　何でエ、そら！

お鐘　金貸しもしてるのさ。ちょいと利息が付くだけですよ。すぐに返せば同じこと。さ、この証文に指ついて。（と証文を出す）

鈴次郎　そんなこと勝手に、テメエ……

お鐘　だったら、今すぐきっちり払いな！

手下が鈴次郎の指に朱を付けようとするが、鈴次郎は振り払って、自分でつめ印を突く。

お鐘　なに、また親分の盆で儲けりゃいいじゃない。この町はカモばっかでしょ。

長治　お待ちしておりやすぜ。

お鐘　儲けた金は女郎屋の方で使ってよ。

お鐘たち、去る。

鈴次郎　何だ、このヤロ！　ちきしょうめ！

と壺を振る。

賽子姫　（一生懸命、鈴を鳴らす）

鈴次郎　……（鳴らす）

賽子姫　丁！

鈴次郎　イヤだ、もう！

賽子姫

と姫は鈴を投げ捨てて去る。

鈴次郎はそんなことにもまったく気付かず、ゆっくりと壺を開ける。

鈴次郎　（愕然とし）どうしちまったんだよ、おい……

鈴次郎の姿、闇に消える。

鬼シゲ　（チンチロリンをやりつつ）とうとう神様、怒らせちまった。可愛い顔して、このお姫様、鬼よりずっとおっかねえぞ。一度敵に回ったら、情け容赦がねえからな。

青鬼　だが鈴次郎は賭場に行った。

鬼シゲ　行くんだよ。行っちまうんだ。ダメな時に限って、ダメな自分を確かめにな。（とサイコロ振るが飛び出して）わ、しょんべん！

青鬼　初めてなんだよ。七つで壺を振り始め、十で博徒になってから、サイコロの目が初めて読めなくなったんだ……

鬼シゲ　こんな時に勝てるはずがねえ。

青鬼　有り金残らず、スッちまった。

場面は変わって、賭場の門口。
負けた鈴次郎が呆然と賭場から出てくる。
お鐘が出てくる。

お鐘　旦那、今日はどうしちまったの？　一つも当てずじまいじゃないか？

鈴次郎　オウ、三両貸せ……

お鐘　ええ、よござんす。今、証文書いて来ますよ。

鈴次郎の前を花売りが通りかかる。
『花はいらんかェ……』
鈴次郎、それをじっと見ているが、突然、花売りに掴みかかり、花を掴み捨てる。

花売り　何すんだ！
鈴次郎　目障りだ！　花なんか売るんじゃねえ！

そこにゾロ政が現れ、鈴次郎を止める。
ゾロ政、花売りに銭を投げ、

ゾロ政　気違エだ。かかわらねえ方がいい。

花売り、去る。

ゾロ政　見せて貰ったぜ、オメエの負けぶり。
鈴次郎　時々、負けてやらねえと、相手がいなくなっちまうんだよ。テメエこそ、いつまで見物してる気だ。
ゾロ政　相手がいなくなった頃、出て行こうと思ったが、あのザマじゃ……そもそも、オメエとカタつけるのに小博打なんかやる気はねえ。やるなら百両、差しの勝負よ。

と小判の包みを見せる。

ゾロ政　しかし、どうやらそれもなさそうだ。
鈴次郎　逃げるのか！
ゾロ政　どっちのセリフだ。テメエ、女にはまりやがったな。犬死にするなと言ったろ。女にはまって、死ぬなんざ、博徒の恥だぜ。
鈴次郎　ナニ言ってやがんだ、馬鹿野郎！
ゾロ政　オメエ、顔つきが甘くなったよ。人でなしのクズ鈴も、所詮は人の子だったということとか。とんだ見込み違えだぜ。オメエの強さは、神様の気まぐれだ。もう俺の敵じゃねえ。
鈴次郎　ふざけんな！
ゾロ政　まあ、しばらくはここにいら。あの負けぶりから見て、もう二度とウケ目はねえだろうが、もう少しマ

シな死に方したくなったら、百両持って来い。博打打ちとして、俺がきっちり息の根止めてやる。

鈴次郎　やかましい、ぶっ殺すぞ！

ゾロ政は去る。

青鬼　それからしばらく鈴次郎は何もしねえで呑んだくれた。儚は寺に預けたきりだ。けれど預けて十七日目。三木松が呼びに来た。儚が生まれて四十九日だ。

八

寺の座敷。
鈴次郎と妙海が座る。
三木松が膳を持って現れ、鈴次郎の前に据える。
膳の上には豪華な料理。
やがて儚が現れる。
儚は上品な着物を装い、美しく髪を結い上げている。
儚は鈴次郎に恭しく一礼をする。

鈴次郎　……

立ち居振る舞いも板に付き、すっかりと気品ある淑女に生まれ変わっている。
儚は鼓を打ち始める。
見事な鼓の音が座敷に響き渡る。
鈴次郎は三木松に注がれた酒に口を付けるのも忘れ、呆然としている

鈴次郎　……

三木松と妙海、手を叩く。

三木松　ブラボー！　素敵っ！　儚ーっ！

儚も顔をほころばせ。

儚　鈴さん！

と鈴次郎に抱きつく。

儚　ねえ、どう？　上手だった？　儚、変わった？
鈴次郎　お、オウ……
儚　いろんな事を覚えたの。読み書きも、お歌も舞いも。これも全部儚が作ったのよ。
妙海　儚。
儚　（慌てて）はい……

改めて鈴次郎の前に座り直し、

儚　鈴次郎様のお陰で、儚はこのように育ちました。まことに有り難うございました。

と頭を下げる。

妙海　儚の育ち振りには何より私が驚いた。乾いた土に恵の雨の浸み入る如く、さまざまな知恵と知識を瞬く間に身につけてゆくのじゃ。この子には一日がまるで一年。読み書きも先頃覚えたばかりであるに、はや源氏物語を読み始めた。
儚　（『源氏』の本を構えて読み）いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなききはにはあらぬが……
三木松　（鈴次郎に）意味わかる、兄さん？
妙海　もうよい。物語はまた明日じゃ。今宵は呑もう。
三木松　鈴さん、儚の手料理食べてあげて。アンタに食べてもらうんだって、朝から大変だったんだから。
儚　（恥ずかしがる）
三木松　何、照れてんのさ。アンタ、やんないなら、私が鈴さんに食べさせちゃうよ。
儚　ああ、ダメ。三木松さんの意地悪……（と食べさせようとする）
鈴次郎　（拒んで）よせ、バカ。（と手づかみで）
儚　ダメよ、お行儀の悪い……

鈴次郎　うるせえ……
儚　それは天ぷらのおだし。飲むんじゃないの。それはお飾り。ああ、この人、松の葉食べちゃった！
三木松　儚が教えてあげなきゃダメだ。

と三人、笑い合う。

鈴次郎　何がおかしい！　笑うねえ！
儚　鼻の頭にご飯が付いてる！（と尚も笑う）

すると鈴次郎、箸を投げ付け、

鈴次郎　黙れこの野郎！　笑うんじゃねえ！　何だ……こんなもん！

と膳をひっくり返す。

儚　鈴さん！
鈴次郎　何だ、こんなもん……ふざけんな！　人が大変な時にテメエは……二十両もかけて、こんな下らねえこと。金返せ、泥棒め！
三木松　何いってんだよ、こんなに良い子になったんじゃないさ！
鈴次郎　黙れ、ケツの穴！（と殴りつける）
儚　（止めて）鈴さん、やめて！
鈴次郎　（儚に）テメエが来てから、ロクなことが起きねンだ。
儚　鈴さん……
鈴次郎　気安く呼ぶねえ！（と頬を叩き）どうせ無用の役立たずなら、せめてもの慰めにマラぶっこんで、水にしてやる！
儚　イヤだ……やめて。鈴さん、イヤだ……お願いだから！鈴さん、助けて……

と逃げる儚を鈴次郎は捕まえて押し倒す。
しかし妙海が錫杖で鈴次郎を打ちすえる。
頭を押さえて倒れる鈴次郎。

儚　鈴次郎のバカ！　嫌いだ！　鈴なんか、大嫌いだ！
鈴次郎　何を……
儚　死んじまえ！　嫌いだ！　嫌いだ！
鈴次郎　（笑いだし）ああ、嫌え嫌え。とことん嫌え！しかしテメエは俺のモンだ。どうしようと俺の勝手なんだよ。どこにも行かせねえからな。テメエはずっと俺のドレイだ。（手を掴み）オウ、行くぞ！
儚　……（首を振る）
鈴次郎　何してんでえ、もう終わりだ！　こんなとこに、いつまでいてもしょうがねえ！
儚　……（首を振る）
三木松　儚ちゃん……
鈴次郎　（妙海に）俺の女だ、文句があるか！
妙海　まこと人間のクズじゃな。
鈴次郎　ああそうだ。それが何だ！
妙海　儚よ、構わぬ、隙を見て逃げなさい。もうこれ以上、恩など感じる必要もない。こやつは人間のクズじゃ。こんな奴といると、そなたの高潔なる魂にも傷が付く。人間となる妨げじゃ。
鈴次郎　オウ、逃げたきゃいくらでも逃げろ。けどいいか、俺は必ずみつけだす。どこまでも追いかけ回して、ふん捕まえ、ぶっ殺してやる。逃げられるもんなら、逃げてみろ。

と儚の手を放して睨み付ける。

儚　……
鈴次郎　行くぞ。

と鈴次郎は去る。
儚は押し黙り、その後に付いて行く。

三木松　お待ちよ、儚！

三木松は散乱した鼓と本を有り合う布に慌てて包んで持たせてやる。

妙海　殺しても構わぬ。必ず、そこから逃げなさい！　仏心も捨つるのだ。それもまた人への道じゃ！

暗転。

九

河原。
石が積まれている。

青鬼　夜の河原だ。頭の上には欠けて行くばかりの三日月。
賽の河原じゃあるまいに、誰が積んだか、供養の石。
その石を鬼でもねえ馬鹿な男が蹴り倒す。

鈴次郎、現れ、塔を蹴り倒す。
その後を儚がついて来ている。
沈黙。

鈴次郎　逃げねえのかよ？
儚　……
鈴次郎　ブッ殺されるのがそんなに怖えか？
儚　ごめんなさい。鈴さん、人に笑われるのが一番嫌いだったんだよね。
鈴次郎　わかったような口効くんじゃねえ。女郎屋に売り飛ばすぞ。
儚　……
鈴次郎　シケた面すんじゃねえ、馬鹿野郎！
儚　ねえ鈴さん、私、消えたくない。この世にいたい。生きて人間になりたい……
鈴次郎　……
儚　鈴さんには心の底から感謝してます。鈴さんがいなけりゃ、私はこの世にいなかった……その上に、高いお金を出して私のこと、お寺に預けてくれた……鈴さん、本当にありがとう。
鈴次郎　……
儚　楽しかった。読み書きを習っていろんなモノの名前を覚えたの。花や木や鳥や虫……モノだけでなく、人の心や思いの名前も。喜びとか哀しみとか怒りとか憎し

みとか……本や歌もたくさん読んだ。笑い話に幽霊話、戦さの話しに恋の話……何もかもが面白い。ますます私、人間になりたくなった。（と本を抱く）

鈴次郎　……

儚　このご恩は忘れません。必ずご恩返しをします。鈴さんのいうこと何でも聞きます。ただどうか、あと五十日。五十日だけは私を助けて下さい。お願いです。ねえ、鈴さん……

そして儚は、鈴次郎に触れる。

鈴次郎　何すんだ……

儚　そのまま、じっとしていて。鈴さんは何もしないで……

儚、なまめかしく鈴次郎に寄り添い、そのカラダを愛撫し始める。

儚　教えて貰ったから……

鈴次郎　……

儚　鈴さんのカラダ、暖かい。最初からそうだった。私はこの温もりが大好き。鈴さん。

鈴次郎　（快感に身もだえ）ああ……

儚　動かないで。儚に任せて……五十日経てば、好きにしていいから……その時は好きなだけ私のこと苛めていいから。でも今は……ね。

しかし、鈴次郎は儚を突き飛ばし、

鈴次郎　や、やめろ！　よせ！　それがカマに習った手管か！　気持ち悪ィんだ、馬鹿野郎！

儚　……

鈴次郎　それより金だ。勝負に行かなきゃなんねンだ。タネ銭だよ、博打のタネ銭。オウ、その着物、脱げ。一

人でいいべべ着やがって。飾りもよこせ、このヤロ！
（と髪飾りなども奪い取る）太鼓と本もだ。

儚　これは……

鈴次郎　よこせ。

儚　着物や飾りは構わない。でも、これだけは……

鈴次郎　やかましい。出せ。

儚　待って、鈴さん……

鈴次郎　俺の言うことが聞けねえのか！

儚　……

鈴次郎　（奪い取り）ナニしてやがんだ。行くぞ。

そして鈴次郎は去る。
儚も静かに後に付いて行く。
入れ替わって、また石を積む子供がやってくる。
たちまちそこは賽の河原に。

子供　一つ積んでは父のため、二つ積んでは母のため……

青鬼、鬼シゲを呼ぶ。

青鬼　おい、シゲ兄さん、時間だよ……

鬼シゲ　オウ、やるか……

そして青鬼と鬼シゲは子供の前に立ち、

鬼シゲ　ボウズ、ずいぶん高く積んだな……けど残念だな。
こうして元の黙阿弥よ。

青鬼と鬼シゲ、石を蹴り倒す。泣き叫ぶ子供。

鬼シゲ　信心なんか何の役にも立たぬわい！

けれどその時、俄に穏やかな光が満ちあふれ、
地蔵菩薩が現れる。

地蔵菩薩　コレ、惨いことを為すでない。やめぬか、鬼ども！
鬼シゲ　何だ、貴様は！
地蔵菩薩　地蔵菩薩です。親孝行を為さんとする坊やのけなげなる姿を見て、救いに参った。
子供　じぞーぼさつさま！
鬼シゲ　ええ、邪魔立てするな、このガキもろとも殺して食うぞ！
青鬼　オウ、兄貴！

と襲いかかろうとするが、地蔵菩薩は数珠を出して念じ始める。
鬼たちはたちまちその霊力に苦しめられる。

地蔵菩薩　さあ、坊や、極楽浄土に連れていってあげましょう。
子供　ありがとうございまする。
地蔵菩薩　これからも深く信心をし、親孝行と慈悲の心を忘るるでないぞよ。
子供　アイ、アーイ！
地蔵菩薩　アナ、ありがたやありがたや～。
鬼シゲ・青鬼　恐れ入ってございまする～。

地蔵菩薩は子供を連れて去る。
それを鬼シゲと青鬼は土下座で見送り、

青鬼　名付けて『地蔵菩薩ショー』よ。毎日、昼夜二回公演だ。
鬼シゲ　さ、チンチロリン。

と鬼シゲは去る。

青鬼　大馬鹿野郎は、着物と本を売り飛ばし、僅かばかりの金を作った。そして、その金でまた博場へ行った。そこしか行き場を知らねえんだ。

十

ムササビ一家の賭場。
数人の客にお鐘、そしてゾロ政。
そこに鈴次郎が来る。鈴次郎に連れられて来た儚も賭場の隅に座る。

鈴次郎　遊ばせてもうぜ。（ゾロ政）小博打さ。クスブリ続けで銭がねえ。すまねえが、賽も替えてくれねえか。何せツキがなくってな。
長治　替えてやんな。
お銀　改めますか？
鈴次郎　その必要はねえが……カタチだけ。（と賽を手に取ってみて）お手柔らかにお願いしますぜ。
中盆　そんじゃ、始めやす。
ゾロ政　ちょいと待った。今、賽がすり替わった。
長治　ナニ！
ゾロ政　右手の中に元のがある。
鈴次郎　！
長治　オウ、動くねえ！
鈴次郎　因縁つけやがんのか！　間違いだったら、どうなるかわかってんだろうな！
ゾロ政　残ったこの目くれてやら。こんなチンケなイカサマを、見間違うガラス玉ならいらねえよ。
長治　旦那、調べさせて頂くぜ……オウ！
若い衆　へい。

と鈴次郎を取り押さえるが、

若い衆・権太　あ、ナニすんでエ！
若い衆・勘太　こいつ、飲み込みやがった！
権太・勘太　出しやがれ、この野郎！
ゾロ政　（替えられたサイコロを割り）ほら、こっちには

細工がしてある。

長治　この野郎！

鈴次郎　俺がやった証拠はねえぞ！　テメエが仕組んだ細工だろ！

長治　叩きのめして、腹ン中のモノ、吐き出させろ！

若い衆たち、鈴次郎を捕まえて殴りつける。

儚、思わず止めに入り、

儚　おやめ下さい！　お願いします！

若い衆・勘太　ええ邪魔だ、どきやがれ！（と突き飛ばす）

長治　吐き出せ、この腐れ外道が！

鈴次郎　俺はやってねえ！

長治、一際、激しく鈴次郎を打つ。

が、それをゾロ政が止めて、

ゾロ政　やめやしょう、親分さん。こんな野郎に関わり合うと、こっちの手まで汚れらぁ。（鈴次郎を蹴り）見下げ果てたぜ。とうとう本性晒しやがったな、この親殺しの虫ケラめ。親分さんよ、ナニを隠そう、この野郎は母親殺しの下手人だ。

長治　え……

ゾロ政　ガキの頃、テメエの母親を殺して金を取り、故郷の町から逃げ出したのよ。

長治　産みの母親をか？

ゾロ政　それもたった三分の銭のためさ。もっとも親も梅毒持ちの淫売だがね。

一同　……

ゾロ政　ただその人でなしが博打にだけは能があり、ちったあ人にも、その名を知られる男になったんだ……それなのにこの馬鹿は、そのたった一つ、神様が恵んでくれたモノまで、こんなふうに台無しにしやがって。

テメエのような馬鹿野郎には、馬鹿野郎でも言葉が足りねえ！　早えとこ、地獄に堕ちて、別の名を付けて貰いやがれ！（と蹴り上げる）

儚　（鈴次郎を庇って）お許し下さいませ、もうお許し下さいませ……

ゾロ政　この俺が、唯一負けた男だぞ。勝負のために、ナニもかも捨てて生きてきた、このゾロ政がただ一度、ただ一度、テメエにだけ……

儚　お願いでございます……

ゾロ政　（蹴るのをやめて）もう二度と会うこともねえ。あばよ！

と行こうとすると、鈴次郎が唸り声を上げて起きあがり、

鈴次郎　待ちやがれ、一つ目、逃げるのか！

ゾロ政　ナニを……

鈴次郎　この俺と勝負せずに逃げやがンのか、臆病者！残った片目がそんなに惜しいか！

儚　鈴さん！

鈴次郎　どけ！（と儚を突き放し）いかにも俺は親殺しだ。テメエの母親、この手にかけてぶっ殺した。だが、その時から今日この日まで、誰にも頼らずサイコロだけに命を賭けて生きて来たんでエ。鈴次郎をナメんじゃねえぞ！　ゾロ政、俺と百両で勝負しやがれ！

お鐘　お待ちよ、あんた、百両なんて持ってんのかい？私は十両貸してンだよ。

鈴次郎　馬鹿にすんな！　持ってらぁ。

お鐘　どこに？

鈴次郎　ここにはねえが、ちゃんとある。

お鐘　オツムの具合が直ったって、この子の売値は二十が限度。

鈴次郎　やかましい！　あるったら、あるんでえ！　痩せ

ても枯れても、この鈴次郎、百ぐれえの金、いつだって用意出来らあ。

ゾロ政　三日後の船が出るまで、ここにいる。いつでも来やがれ。

ゾロ政と人々、去る。

鈴次郎と儚、居所替わりにて、

夕暮れの河原。

鈴次郎、じっと黙っている。

儚は鈴次郎の傷を拭っている。

鈴次郎　おう、儚……あの本、悪かったな。ナニ、すぐに新品で買ってやるからよ。だから、待ってろ。な。

儚　……ちきしょう。どいつもこいつも……ぶっ殺してやる。

儚　ねえ、鈴さん、どうして博打打ちになったの？

鈴次郎　あ？　……これしかなかったんだよ。

儚　それじゃ、好きでやってる訳じゃないんだ。

鈴次郎　当たり前だ。

儚　じゃあ、もうやめよ。

鈴次郎　ナニ？

儚　やめられないの？

鈴次郎　やめてどうやって食ってくんでぇ。

儚　仕事はあるよ。物売りだって、百姓だって。

鈴次郎　馬鹿言うな。好きでやってる稼業じゃねえが、儲かるんだ。

儚　でもツキのない時だってある。

鈴次郎　やかましい。

儚　鈴さんの心がいつもササクレ立ってるのは、博打のせいじゃない？　博打の暮らしは明日が見えないから。

鈴次郎　ササクレ立ってンのは生まれつきだ。俺は母親殺す人間だ。嘘じゃねえぞ。本当にやってんだ。

儚　でもそれだって、止むに止まれぬ事情があったんでしょ。
鈴次郎　ねえ、そんなもん。
儚　あるに決まってる。どうしてそんなに、ひねくれるの？
鈴さん、本当は優しい人なのに……私は知ってるよ。
鈴次郎　オメエが何を知ってンだ！
儚　だって私、鈴さんに抱かれて育ったんだよ。

そして儚はいきなり鈴次郎をくすぐる。

鈴次郎　バカ！　やめろ！　ナニすんだ！
儚　ひねくれ者！
鈴次郎　オウ、よせって……
儚　あんたが素直になるまでやめない。
鈴次郎　傷が痛エんだ！　本当に。痛エよ、やめろ……
儚　（やめて）ゴメン、鈴さん……大丈夫？
鈴次郎　かかったな。ぶっ殺してやる。（とくすぐり返す）
儚　ああ、やめろ！　コラっ！　だめだよ、本当に……
鈴次郎　水になりやがれ、このヤロ！
儚　（と笑い転げて）ゴメンナサイ、勘弁して……ああ、もう死ぬ……水になる！

その時、近くで水鳥の飛び立つ音。
思わず抱き合う、二人。

鈴次郎　金玉鳥が脅かすねえ！

そして笑い合う。

儚　ねえ鈴さん、普通の暮らしをしてみない？
鈴次郎　え？
儚　二人で所帯を持つんだよ。そして子供を作るの。
鈴次郎　テメエとか？

儚　私、必ず本物の人間になるから。絶対になってみせるから……そして鈴さんのために一生懸命働く。

鈴次郎　誰がオメエなんかと……

儚　ねえ、鈴さん……鈴さんは私のこと嫌いなの？　私は好きだよ。鈴さんのこと。誰が何て言ったって。

鈴次郎　……

儚　私が嫌い？　私の目を見て。

儚はいきなり、鈴次郎に口付けする。

儚　鈴さんのこと、幸せにしてあげたいの。寂しい人だから。ずっと独りぼっちでしょ。

鈴次郎　……

儚　人に優しくされたことがないから、人にも優しく出来ないんだよね。気持ちはあってもやり方を知らないから。でも諦めることない。やり直せるよ。流れ者の暮らしも面白いけど、それは本で読めばいい。

鈴次郎　……

儚　幸せになろう。二人で人間らしい暮らしをしよう。そりゃ、この世にはどうにもならないこともあるけどさ、夢を持つんだよ、人間は。そうすれば、頑張れるんだよ。心だってササクレなくて済むんだよ。

その時、鈴次郎は苦しみ始める。

儚　どうしたの？　もうふざけないで。

鈴次郎　違うよ、本当に腹が……

吐き出すとサイコロだった。

鈴次郎　サイコロだ……

鈴次郎、キレイに拭き、手の中で転がす。

鈴次郎、じっとそれを見ている。
風に揺れる草の音。

儚　ダメだよ、もう。博打は終わり。
鈴次郎　……
儚　それは捨てるの。（と奪おうとするが）
鈴次郎　（手を払う）普通の暮らし……
儚　そう。
鈴次郎　（笑って）そんなもんが出来るもんなら、とっくにしてら。
儚　鈴さん……
鈴次郎　親を殺した人でなしだよ。顔見るだけで、皆、逃げらあ。俺は今まで、こうして独りで生きてきたんだ。
儚　私は逃げないよ。もう独りじゃないよ。
鈴次郎　信じられるか！　テメエだってそのうち逃げ出すに決まってるんだ！　俺の本性を見て、すっかり愛想尽かしてな。
儚　信じてよ。
鈴次郎　俺は誰も信じねえ！　信じるのは、この俺自身と賽の目だけだ！
儚　博打じゃ幸せにはなれないよ。
鈴次郎　コレで生きて来たんだ。
儚　勝ち続けるとは限らない。
鈴次郎　勝ち続けて来た。
儚　でもこれからはわからない。第一、今まで幸せだった？博打に勝って。それだけで本当に幸せだった？
鈴次郎　……
儚　鈴さん！
鈴次郎　今までに、俺を心底助けてくれたのは……博打だけだ！

その時、鈴の音が聞こえてくる。

鈴次郎　待て……この音……鈴だ。あの鈴の音だ！

賽子姫が現れる。姫は嬉しそうに鈴を鳴らしている。

鈴次郎　間違いねえ。聞こえる！　あの音が聞こえる！

鈴次郎、慌ててサイコロを振る。

賽子姫、鈴を鳴らす。

鈴次郎　間違いねえ。これだ。これだ……（と何度も確かめ）やった……助かった！　神の救いだ。仏様のお助けだ。（笑って）これでもう大丈夫だ！

儚　鈴さん？　何？　どうしたの？

鈴次郎　どきやがれ。オメエは失せろ。

儚　鈴さん……

鈴次郎　お前は俺を惑わす化け物だ。もう構わねえ。どこへでも行け。消え失せろ！　俺はいいんだ。俺はこうして生きていくんだ！

鈴次郎、駆け出して行く。

呆然と立ち尽くす儚。

やがて儚も鈴次郎を追って行く。

賽子姫が愉快そうに鈴を鳴らしている。

その音が闇に響き渡る。

十一

闇夜の辻。
妙海と鈴次郎。少し離れて三木松。

妙海　百両の大金を貸せ、と……
鈴次郎　あんたが、持っているのは知ってるんだ。利子をつけて必ず返す。
妙海　（せせら笑って）気は確かか？
鈴次郎　絶対に俺が勝つんだ。
妙海　ツラを見るのも不愉快じゃ。立ち去れ、ふた足の犬め。貴様など、未確認歩行物体じゃ。
三木松　アンタが悪いんだよ！
鈴次郎　こうして拝むから。
妙海　目に入らぬ。
鈴次郎　ナムアミダブツだ。
妙海　聞こえませぬ
鈴次郎　この通りだ！（と土下座をする）
妙海　ええ、しつこい！

と錫杖で打つ。

鈴次郎　こんなに頼んでもダメか……
妙海　行くぞ、三木松。ラブラブタイムじゃ。

鈴次郎、懐刀を抜き、背後から妙海を刺す。

三木松　和尚様！
鈴次郎　ぶっ殺してやる……
三木松　（震えて）旦那、待っておくれ……

しかし鈴次郎は逃げようとする三木松も掴まえて刺し殺す。

鈴次郎は激しく震えている。握り締めた刀がなかなか手から離れない。
そこに儚が姿を現す。

儚　鈴さん！
鈴次郎　な、何しに来たんでえ！　失せろ！　ぶっ殺すぞ、馬鹿野郎！

鈴次郎は儚の姿を見ると、ますます錯乱し、離れぬ刀と格闘する。必死に自分の手を叩いて刀を落とす。そして妙海の懐を探り、百両の小判を掴み出す。

鈴次郎　どうだ、これが俺の本性だ。好きなだけ笑え。
儚　……
鈴次郎　笑えよ、笑え！　この野郎、笑え！

と儚をくすぐる。

儚　鈴さん……鈴さん……

そのうちに鈴次郎は泣き崩れ、儚にすがる。

鈴次郎　勘弁してくれ……勘弁してくれ……
儚　何だって、こんなこと……
鈴次郎　百両を……勝負の金の百両を……
儚　バカ！　バカ！　大ばかやろう！（と鈴次郎を突き放し、二人の遺骸に向かって必死に手を合わせる）
鈴次郎　……
儚　何やってンのよ、あんたもやって！
鈴次郎　（手を合わせる）
儚　ああ……どうして……鈴さん！

鈴次郎、震えている。

鈴次郎　これ切りだ……これ切りだ、なあ儚……

儚　ええっ？

鈴次郎　だから、儚……見捨てないでくれ。俺の側にいてくれ……失せろなんてのは嘘だ。いてくれ。どこにも行かねえでくれ。後生だ。俺を一人にしねえでくれ……鈴さん……

儚　これ切りで足を洗う。これで最後だ。だからよォ、儚……オメエのいう通りだ。明日の知れねえ根無し草はもうたくさんだ。こんなことも二度とごめんだ……この勝負が終われば二百の金が手に入る。そしたら、二人で遠くへ行こう。知らねえ土地で所帯を持とう。

鈴次郎　馬鹿なこといってんじゃないよ。こんなことして。

儚　この罪は生涯かけて償う。

鈴次郎　私は人間になりたいんだよ。これじゃ、本当の鬼じゃないか。

儚　生まれ変わる。俺は、これ切りで、生まれ変わる。これ切りで……これまではどうしようしもなかったんだ。わかってくれ。俺はずうっと独りきりだったんだ、生まれてこの方、お前という女に巡り会うまで……

鈴次郎　……

儚　オッカアもいた。だが、一度も抱いてもらえなかった。俺を生ませた男のことが、殺してえほど憎いんだとよ。そういって、薄汚ねえ野郎どもに身は売っても、俺にだけは触れようともしてくれなかった。諦めようと思ったさ。それが俺の定めだと。でも割り切れねえ。いねえ親なら諦めもつくが、目の前にいる親が抱いてくれねえ。それがどうにも割り切れねえ……十二の秋だ。些細なことから喧嘩になって、俺はこの手で……以来、俺は独りきりだ。

鈴次郎　……

儚　オメエが初めてだよ。この俺のこと、嫌わないで

くれたのは……好きだなんて言ってくれたのは……これでオメエにまで見捨てられたら、俺はもう生きていけねえ。頼む。これだけ見逃してくれ。これが終われば俺は本当に生まれ変わる。なあ、儚……お願いだ、お願いだ……

と抱きつく。

儚　私は鈴さんに恩があるんだよ。でもね、鈴さん。それは普通の恩じゃない。鈴さんは、私に一番大事なことを教えてくれたんだ。この世ってのは、とても暖かいところなんだって。そして人間は優しいって。死体で出来た冷たい私を、しっかり抱いて暖めてくれてさ。だから私は生きていたいって思うようになったんだ。生きて人間になりたい。鈴さんみたいな暖かい人間に、って……なのに鈴さん、どうしたんだよ、このカラダ。すっかりと冷え切っちまって。まるで氷のようじゃないか……

鈴次郎　これで最後だ。これ切りだ。

そこに賽子姫が鈴を鳴らしながら現れる。

鈴次郎　お前は港の旅籠で待っててくれ。すぐにカタつけて、迎えに行くから。

儚　やっぱりダメだよ、そんなこと……博打はやめて。

鈴次郎　絶対勝つと決まってるんだ。この勝負は今までロクなことのなかった俺に、神様が最後にくれた褒美なんだ。どうしても行かなきゃいけねえ。

儚　離れるのはイヤ。私も行く。

鈴次郎　来ちゃいけねえ。それが勝負の隙になる。すぐ行くから、待っててくれ。落ち合ったら、そのまま旅立ちだ。神掛けて、これが最後だ。

賽子姫、鈴を鳴らしつつ、歩き始める。
鈴次郎はその後を静かに付いて行く。
儚は言葉もなくそれを見送る。

十二

賭場。天下分け目の一騎打ち。
ゾロ政はすでに鈴次郎を迎え撃つ構え。
長治、お鐘他、見物人数人。
青鬼、鬼シゲも賽の河原から見物する。
そこに賽子姫の鈴音に導かれた鈴次郎がやってくる。
両者、百両の金を目の前に置き、
待ったなし。
賽子姫の鈴の音も止んで、静寂。

ゾロ政　今日がオメエの命日だ。
鈴次郎　（不敵に笑い）ゾロ政、破れたり。
長治　二つ先に取ったが勝ちだ。
お銀　入ります。（と振る）
中盆　さあどうぞ。

息を詰め、壺をみつめる二人。
賽子姫はなぜか鈴を置き、おもむろに懐に手を入れる。
そして取り出したのは横笛。
姫は下手くそな笛を吹き始める。

鈴次郎　（狼狽えて）な、何だ……
賽子姫　（笛を吹く）
鈴次郎　どうなってやがんでえ！　な、何だ、これは……
ゾロ政　どうした！　俺から行くぜ。
鈴次郎　待て……
賽子姫　（笛を吹く）
鈴次郎　（頭を抱える）
ゾロ政　丁！
鈴次郎　半……

お銀　勝負！
中盆　シニの丁。
ゾロ政　そら来たァ、鈴次郎が死にの目だ！
鈴次郎　……
賽子姫　（手を叩いてケラケラと笑う）
ゾロ政　さあ、あと一つだ。
鈴次郎　……
お銀　入ります。（と振る）
中盆　どうぞ。

息を詰め、壺をみつめる二人。
賽子姫は今度は、奇妙な音の出る玩具を手に持つ。
カタカタカタカタ……
嬉しそうにそれを鳴らす姫。

鈴次郎　！
ゾロ政　オメエの番だ。張れ。
賽子姫　（鳴らす）
鈴次郎　この野郎……半だ！　半！
ゾロ政　この勝負もらった。丁！
お銀　勝負。
中盆　ピンゾロの丁。
ゾロ政　見たか、ゾロ政、とどめのぞろ目だァ！

賽子姫、手を叩いてケラケラ笑う。
期せずして、見物人からも拍手が起きる。

ゾロ政　一つも取れずか。こら、クズ、ゴミ、馬のクソ！
この世の中では負けたがクズだ！　なあ、クズ次郎！

と笑うと、見物人たちも笑う。

鈴次郎　笑いやがったな……俺を笑いやがったな……
ゾロ政　ああ笑った。腹の底から可笑しいや。（と笑う）
鈴次郎　笑うんじゃねえ、この野郎！
ゾロ政　悔しいか、悔しいか……（と笑う）
鈴次郎　まだ終わってねえ、もう一勝負だ！
ゾロ政　なんだぁ？
鈴次郎　勝負しやがれ。
ゾロ政　銭はあんのか、ボロクズ野郎！
鈴次郎　金貸し婆ァ、金を貸せ。百両だ。
お鐘　ご冗談でしょ。これ以上、カタもなしに貸せますか。
鈴次郎　貸せ！
ゾロ政　（笑う）一文無しが、何賭けるンだ？　こら！　どした、クズ？　ホラホラ……（となぶる）
鈴次郎　女だ……女を賭ける。
ゾロ政　なに……
鈴次郎　クソ婆ぁ、あの女、二十と言ったな。港の旅籠に一人でいる。儚がカタだ。
お鐘　それなら乗るよ。二十両。
ゾロ政　しょうがねえな……振っとくれ！
お銀　入ります。（と振る）
中盆　張った。

息を詰め、壺をみつめる二人。

鈴次郎　これから人間の暮らしをすンのに、一文無しじゃしょうがねえだろ。神様、俺を助けてくれ……

賽子姫は今度は鈴を持つ。
そしてそれを振るが、それまでとは全く違う音が鳴り響く。
まるで運命を告げる、聖堂の鐘のような響きだ。

鈴次郎　（音を聞いて絶望し）ああ！
ゾロ政　張れ。
鈴次郎　……丁！

その時、青鬼が盆ゴザの近くまで飛び出す。

青鬼　馬鹿野郎！　ここは半だ！　半に張れ！　ここまで来て何で迷うんだ！　目が読めねえなら、迷わず半だろ！　割り切れねえ、半端の半だ！　それがテメエの生き様じゃねえか！　それをどうして、変えるんだ。よりによって、絶対負けちゃいけねえこの勝負で！
ゾロ政　半。
お銀　勝負。
中盆　シソウ（四・三）の半。
ゾロ政　とうとう死んだな。その顔にも死相が出てるぜ、鈴次郎。
鈴次郎　あああああ……

青鬼も鈴次郎と同じように、悲鳴を上げて頭を抱え込む。
聖堂の鐘が高らかに響き、賽子姫はこの上なく幸せそうに笑い転げている。

十三

港の旅籠。
儚とお鐘。

お鐘　あんたの旦那はもう来ないよ。
儚　どこ行ったんです。鈴さんは？
お鐘　さあ、そこらで野垂れ死にでもすんだろ。
儚　……
お鐘　さあ、行くよ。今日からお客を取るんだよ。
儚　今日から……
お鐘　こっちだって、結構な銭出してんだ。
儚　あと四十と一日、待っては頂けませんか？
お鐘　なに？
儚　四十と一日。それだけ待って頂ければ、仰る通り致します。
お鐘　何だ、その半端な数は？
儚　水になるんです。今、男の人に抱かれたら、私は水になっちまうんです。
お鐘　は？
儚　私は鬼に作られた女なんです。
お鐘　馬鹿なことといってんじゃないよ！
儚　本当なんです。今日が五十と九日目。でも百日経てば魂とカラダがひっついて……
お鐘　何言ってんだい、馬鹿馬鹿しい。恨むなら、あいつを恨みな。あいつがあんたを売ったんだ。
儚　……
お鐘　定めと思って諦めんだ。ほら、行くよ！

儚、お鐘に腕を掴まれる。

儚　諦めないよ。私は諦めない……必ず百日生き延びてやる。どんなことしたって生き延びて、人間になってみ

せる……

ボロ雑巾のようになった鈴次郎の姿が闇に浮かび上がる。

鈴さん、あんたを恨みはしないよ。どっか遠くに行って暮らそうって、そういってくれたのは嘘じゃない。私はそう信じてる。あんたは。心底寂しい人だ。可哀想に、たった一つ信じ続けた、サイコロにまで裏切られちまってさ……

私もとうとう独りぼっちだ。でもね、鈴さん、私は諦めない。独りになったって夢を捨てないよ。生き延びて、百日目を迎えてみせる。本当の人間になってみせる。そしていつか普通の暮らしをするんだ。私の子を産んで育てるんだ。鈴さんとそうしたかったけど、しょうがない。でも私はこの夢だけは捨てないよ。

儚

儚はしっかりと歩いて行く。

十四

鬼シゲ　それから一ト月が経った。何しろ女郎にされちまったんだ。男に抱かれねえはずがねえやな。けどいつになっても女郎が水になったなんて噂は聞こえてこねえ。その代わり、別の女郎の噂が立った。

シジミ売りの米造と助兵衛。

助兵衛　いい女なんだってね。

米造　姿もいいがテクも凄い。

助兵衛　オオ、テクか。

米造　あんなに上手い女郎は他にいねえ。どんな男もアッという間に沈没よ。

助兵衛　そうかい。

米造　ただし、させねえんだ。

助兵衛　え？

米造　どうにもこうにも、させねえんだ。

助兵衛　させないって。沈没なんだろ。

米造　だから、肝心の的に当たる前に男を沈没させちまうのさ。

助兵衛　何だ、空打ちか。お前だけだろ、ヘナチョコめ。

米造　ことごとく皆だ。我こそは見事、マン中の的を射抜いてやらんと、竿自慢も大勢挑んだ。しかし、攻めてるつもりがいつの間にやら攻められて、女みてえにヒイヒイ言わされ、気がつきゃ、敢えなく討ち死によ。けど、これが気持ちいいのなんのって……人呼んで、させず太夫だ。

助兵衛　是非、一度、お手合わせ願いたい。

米造　生憎様、噂が噂を呼びつけて、順番待ちが一ト月だ。

放浪者のようになった鈴次郎、汚い頬被りでそれを立ち聞く。

お鐘、現れる。

お鐘　サアサア、近からんものは目にも見よ、遠からんものは音にも聞け。泣いても、すねても、脅しても、最後の門はくぐらせぬ。触るはよいがくぐらせぬ。当てるも許すがくぐらせぬ。くぐらせぬったら、くぐらせぬ。ご存じ男の生殺し。させず太夫のお目見えだよ。

花魁・させず太夫となった儚、現れる。
たちまちに周りに群がる男たち。
儚、怪しく隠微な目つきで、男たちを誘惑しつ舞う。
儚はその妖艶な舞で、男たちをひれ伏させ、

儚　今日で九十一日目。あと十日。十回夜明けを迎えれば、私は人間になる！

男たちは尚も貪るように儚にまとわりついてゆく。その渦の中に儚は呑み込まれ、幻想のように消えて行く。
後には呆然と取り残される鈴次郎。
賽の河原では、同じように抜け殻のようになった青鬼がうつろな目で、闇をみつめている。

鬼シゲ　一日に十人の男を極楽に送り続け、あと十日、九日、八日……男どもの垂れ流す欲望にまみれながらも肝心の一線だけは守り抜き、させず太夫はついに九十九日目を迎え、あと一日にこぎつけた。日が暮れて、夜が来て、その夜の明ける朝陽を見れば、それがキッカリ百日目。儚の夢のかなう時だ。

女郎屋。
お鐘と長治。

お鐘　大変だよ、あんた。殿様が店に来ることになった。
長治　殿様が？
お鐘　させず太夫の噂を聞きつけて、遊びに来るって。
長治　そりゃ、凄えぞ。

と話すところにお供を従え、殿様登場。
見るからに馬鹿な殿様である。

お鐘・長治　ハハッ……
殿様　苦しうない、面を上げい。お前が、させず太夫か？
気に入らぬ、殺せ。
お鐘　お待ち下りませ。私は女将でございますよ。させず
太夫はこちらでございます！

襖が開き、傳が現れる。

殿様　気に入った。褒美を取らす。
お鐘・長治　お有り難うございまする！
殿様　その方がさせず太夫か？　評判を聞いた。ワシも是
非、所望したい。
お鐘　ええ、そりゃもう。恐悦至極に存じます。心尽くし
のご奉仕をさせて頂ますぅ。
傳　お殿様、どうぞ、こちらへ。

と傳は誘う。

殿様　（だらしなく笑い）そんじゃ、いってくる。
一同　いってらっしゃいませ！

と殿様は傳に手を引かれて襖の奥へ。

お鐘　あんたァ、やったよ。とうとうアタシたちにも運が

向いてきた。田舎町のセコイ縄張り守り続けて幾歳月、私も長く日陰の身分に耐えて来たけど、これでもう貧乏とも苦労ともオサラバだ。

長治　俺に甲斐性がねえばかりに、お前には苦労をかけた。

お鐘　何言ってんのさ、惚れた男にかけられる、苦労は女の勲章です。

長治　お鐘。（と抱く）

お鐘　長さん。

しかし殿様が飛び出して来る。

殿様　どういうことだ！

お鐘　どうしました、お殿様！

殿様　女郎ごときが、このワシを愚弄するか！

お鐘　うちの太夫が何か粗相を！

殿様　何もしないうちに終わっちゃったじゃないか！

お鐘　は？

殿様　だから、何もしないうちに終わっちゃったんだよ。着物だって半分しか脱いでないよ。ワシがさあ、これからどう攻めてやろうか、と思ってるうちに、あの女が勝手にあんなこととか、こんなこととか始めおって。気持ち良すぎて、思わずピュッって……もう！

長治　さようでございますか。しかし、殿様、それでは是非、二回戦をお楽しみ下さりませ。

お鐘　そうです。二回と言わず、何度でも！

殿様　それはワシに対する嫌みか？

お鐘　は？

殿様　ワシは一日一つがやっとなんじゃ！　だいたい、何じゃ！　ワシは女を攻め立てるのが好きなんじゃ！こう、帯を掴んで……良いではないか、良いではないか、グルグルグルって！　そのために殿様やってるようなもんなんだよ。それを、あの女郎は、やるばっかりで、なぜやらせぬ！

長治　はい。そこがその、させず太夫のさせず太夫と申す所以で……

お鐘　大評判をとってるんでございます。

殿様　ワシは殿様じゃぞ！

お鐘・長治　ハハッ！

殿様　こやつらを引っ立て。打ち首じゃ。

お鐘・長治　お待ち下さいませ！

殿様　女も召し取れ。

供　ハハッ。

僂、供侍に捕らえられ、連れて来られる。

お鐘　この馬鹿！　何てことしてくれたんだ！

僂　私はいつも通りのお勤めを……

殿様　ええ黙れ。お前は城に連れ帰る。しばし回復を待ってから、仕置き部屋に縛り付け、今度こそワシの伝家の宝刀でヒーヒー言わせてやる。何がさせずじゃ、させずにゃおかぬわ、覚悟せい！

僂　お待ち下さりませ……それだけは。どうかご勘弁下さりませ。

殿様　ならぬ。

僂　ではせめて一日。一日だけ待って下さりませ。せめて明日の朝陽が昇るまで……正直に申し上げまする。私は人間ではござりませぬ。私の正体は、墓場の死体を寄せ集め、鬼が作りし、人ならぬ者。ただし作られてより百日の間、男に抱かれることなくば、魂と肉が結びつき、まことの人となりまする。けれどもし、その百日を待たずして、男に抱かれしその時には、この身はたちまち水となり、消え果てるのでござります。

殿様　水になる……

僂　はい。そして、その百日目がちょうど明日。どうか哀れと思し召し、この身を抱くのは、あと一日、ご容赦下さりませ。

殿様　それはまことか？
儚　はい。
殿様　今日抱けば水になる。
儚　はい。
殿様　面白いじゃない。それ、ドンといってみよう！
供　ドーン！
儚　お殿様！
殿様　だって凄いじゃないかよ、なあ？
供　ハハッ。
儚　ああ……
殿様　すぐさま城に帰る。明日の夜明けが期限とあらば、グズグズしてる暇はない。急いで秘薬も支度致せ。何としても今宵中に回復させるぞ。しかし、これは思わぬ楽しみを得た。そちたちでかした。
儚　お待ち下さりませ……どうか、それだけは……
お鐘　ええ、女郎、黙りおろう！　殿！　そうなんです。珍しい女なんです。私はもう、それを是非、殿に味わって頂きたいと、この日を待っていたんです！　もうピューっと水になりますから。ピューっと。
殿様　苦しうない。褒美を取らす。
お鐘・長治　かたじけのうござりまする！　助かったぁ……
殿様　参るぞ！
儚　アア！

儚、引っ立てられる。
その姿を見る流離いの鈴次郎。

鈴次郎　儚！

たちまちに襲い来る闇。

十五

闇の河原。
鈴次郎が泣きながら叫んでいる。

鈴次郎　鬼……出てこい、鬼……どこにいるんだ。頼む、来てくれ……おい、鬼よ！
鬼シゲ　俺を呼んだか？

鬼シゲが姿を現す。

青鬼　鈴次郎は鬼の姿を見ると、その前に手をついて頭を下げた。
鈴次郎　助けてやってくれ……儚を助けてやってくれ……
青鬼　鬼は笑っていった。
鬼シゲ　人助けを鬼に頼むな。そんなことは地蔵に頼め。
鈴次郎　どの面下げて、今さら地蔵を拝むんだ？　元より人は皆、敵だ。鬼しか頼るモノはねえ。
鬼シゲ　違えねえや。（と笑い）んじゃ、勝負するか？
鈴次郎　？
鬼シゲ　勝てば、女を助けてやる。ただし負けたら、今宵限りで鬼になれ。
鈴次郎　鬼……
鬼シゲ　あれ以来、お前のことを見ていたが、間違いない。お前はいい鬼になる。今宵が限り、人間の命を捨てて、地獄で働く鬼になれ。
鈴次郎　俺はどうしても助けてやりてえんだ。儚を……
鬼シゲ　だから勝負しようじゃねえか。
鈴次郎　鬼になるのは構わねえ。けどどうしても儚だけは助けてやりてえ。なあ、鬼よ、この通りだ……
鬼シゲ　俺は鬼だ、ただの親切は出来ねえ。勝負なら乗る。どうすんだ？　やるのか、やらねえのか？　これで結構忙しいんだよ……（と行きかける）

鈴次郎　待ってくれ。わかった、やる……
鬼シゲ　（支度して）しかし、壺を誰が振るか……
鈴次郎　あんたが振ってくれ。それでいい……半だ。
鬼シゲ　おう、まだ振ってねえよ。
鈴次郎　いいんだ。どのみち俺はそうしか張らねえ。
鬼シゲ　そうか。それじゃ、俺は丁の目出せばいいんだな。
（振って）勝負だ。開くぜ。

するとその手を鈴次郎が止める。

鬼シゲ　何でえ？
鈴次郎　助けてくれねえか……
鬼シゲ　……
鈴次郎　俺はどうだっていいんだ。ただ儚だけは……なあ
よォ、何とかならねえか……
鬼シゲ　手を放せ！
鈴次郎　なあ、鬼よ……
鬼シゲ　馬鹿じゃねえのか？　そんなに大事な女なら、ど
うして売り飛ばしたりするんだよ。お前が地獄に落と
したんだろ。
鈴次郎　……（手を引く）
鬼シゲ　勝負！（と壺を開いて）シロクの丁。やったぜ、
勝った！　どうでえ、うおおぉっ！

鬼シゲ、高笑いをする。
鈴次郎は何も言わず、そのままじっとサイコ
ロを見ている。
やがて鬼シゲは笑いをやめ、

鬼シゲ　わかったよ。助けりゃいんだろ。
鈴次郎　！
鬼シゲ　ただし、お前は鬼になんだぞ。今宵限り。夜明け
前だ。これは譲らねえぞ。そこまで譲っちゃ、地蔵に

なっちまう。

鈴次郎　ああ、わかってる。鬼になる。

鬼シゲ　こんなことしねえんだぞ、普通は……

鈴次郎　済まねえ。この恩は一生忘れねえ。

鬼シゲ　馬鹿野郎、お前の一生はもう終わりだ。

鬼シゲは去る。

青鬼　そして鬼は城に飛んだ。

たちまちそこは城内の仕置き部屋。

縛り付けられた儚。

白装束など装い、すっりその気の殿様。

殿様　南蛮渡来のバイアグラ、なるほど、たいした効き目じゃわい。どれ、さっそく水浴びにかかろうか。

儚　お許し下さりませ……お許し下さりませ……

とその時、稲妻が光り、雷鳴が轟く。

そして、渡し船の櫓を持った鬼シゲが現れる。

殿様　何者じゃ！

鬼シゲ　地獄の船頭鬼シゲだ。その娘、頂きにきた。

殿様　くせ者じゃ、出会え、出会え！

侍たち、駆け付けて鬼シゲに挑むが、鬼シゲはそれらを蹴散らし、儚を救い出し、

鬼シゲ　行くぜ、姉さん。

儚　？

鬼シゲ　オメエを助けに来たんだよ。人間になりてえんだろ！

儚　（思わず）ああ……ナムアミダブツ！

鬼シゲ　（腰が抜けて）拝むな、バカ！　地獄パワーが落ちるだろ！

そして儚を連れて逃げ去る。

十六

賽の河原。
青鬼がじっとみつめている。
そこに鬼シゲと儚。

儚　赤鬼様、有り難うございました。
鬼シゲ　オレじゃねえ。オレは頼まれただけだ。
儚　それじゃ、誰が……
鬼シゲ　オウ、どこだ？　助けて来たぜ！

鈴次郎が姿を現す。

儚　鈴さん！
鈴次郎　……
鬼シゲ　どうしてもお前さんを助けてえって、鬼を泣き落としやがった。夜明けまで、も少しあら。ここでしばらく別れを惜しめ。
儚　？
鬼シゲ　こいつは間もなくこの世とオサラバするのよ。鬼になるんだ。
儚　どうして？
鬼シゲ　お前さんを救うのと引き替えに、オレに命を売ったんだ。半時ほどで迎えにくら。
鈴次郎　かたじけねえ。

鬼シゲは去る。

儚　鈴さん！
鈴次郎　許してくれ儚、オレはお前に酷いことを……
儚　鬼になるって……
鈴次郎　ああ……
儚　……

鈴次郎　こんな大馬鹿野郎、これ以上、この世にいたってクソの役にも立たねえ。

儚　私のために……

鈴次郎　もういんだ。とにかく、こうして会えてよかった……てえしたもんだ。お前は凄えよ。大丈夫だ。お前はもう立派な人間だ。幸せになれよ。お前の子供もきっといい子に育つ。さぞ賢くて、優しい子だろ。立派に育てろ。

儚　鈴さん……

鈴次郎　何もかも、この身から出たサビだ。悔いはねえよ。ただ一つあるとすりゃ……オメエと一緒にいる時に、オメエと同じ夢を持つことができなかったことだ。夢を持てと、オメエがせっかく言ってくれたのに。あの時の俺には、それがどういうことなのか、わからなかった。

儚　……

鈴次郎　そもそも、俺のような半端者には、夢なんて立派なもの、一生縁のねえものと思ってたしな……それがすべてを失って、ほとほと自分がヤになって、地獄の淵まで転がって、俺にもやっとわかった。こんな俺でも夢を見るんだって……

あれからずっと、考えたのはオメエのことだけだ。オメエと過ごした毎日。オメエの顔、オメエの言葉……そして思った。オメエともう一度やり直せたら、二人で所帯が持てたら、どんなにいいだろう、って……

本当だな。人の夢は儚ねぇな……

でもよォ、儚。何もかも失って、もう夢しか残ってねえのに、それも今更かなうはずもねえ、どうにもならねえ夢なのに、その夢、見ると、ここ（胸）が不思議に暖まるんだ。夢の他には何にもねえのに、暖まるんだ……

この鈴次郎の言葉と同時に、青鬼がまったく同じ言葉を賽の河原でぽつぽつと呟いてい

る。だがその声はほとんど聞こえない。

鈴次郎　でもよかった。こんな俺でも、まがりなりにもこの世に生きて夢を見た。儚いが、いい夢だった……お前のお陰だ。

儚　ねえ鈴さん、この世から消えちまうの？

鈴次郎　そうだ。夜が明ける前にな。

儚　もう会えないの？

鈴次郎　ああ、会えない。

儚　何とかならないの？

鈴次郎　もう、ならねえ。

儚　イヤだよ、そんなの！（と抱きつき）嫌だ、ぜったい。

鈴次郎　さよならだ。

儚　嫌だ、嫌だ！　そんなこと言わないでおくれ！

鈴次郎　……

儚　鈴さんのカラダ、冷たいよォ……

鈴次郎　お前が暖かくなったんだ。人間になった証拠だ。

儚　違うよ、それは鈴さんが暖めてくれたからだよ。

鈴次郎　もう離れろ。辛くなる。

儚　嫌だ。

鈴次郎　儚……

儚　離れない。私は二度と鈴さんから離れない。

鈴次郎　頼むよ、なあ……

儚　いくら生き延びたって、人間になったって、こんなんじゃ、ちっとも幸せじゃないよ。

鈴次郎　……

儚　ねえ鈴さん、私を抱いて。

鈴次郎　何言うんだ……

儚　抱いてよ。ねえ。今ここで、私を抱いて！

鈴次郎　儚……

儚　抱いてよォ……これが夢だよ。儚の夢だ。今、ここにいる鈴さんは、私がずうっと夢に思い描き続けてきた、優しい優しい鈴さんだ。この優しい鈴さんの胸に抱か

れて女になるのが、私の夢だったんだよ……だからさ、鈴さん、夢をかなえて。お願いだから、抱いてちょうだい。

鈴次郎（と青鬼）　そんなことしたら、お前……馬鹿野郎、何のために、今まで苦労してきたんだよ。

儚　いいんだよ。抱いとくれ。

鈴次郎（と青鬼）　水になっちまうんだぞ……

儚　私はもう何も望まない。この世で、一番好きな人と結ばれたい。ただ、それだけ。

鈴次郎（と青鬼）　儚……

儚　だいいち私は水になんかならないよ。当たり前だろ。こんなに冷え切っちまった鈴さんに、これ以上、冷たい思いをさせるもんか。約束する。私は水になんかならない。暖めてあげる、鈴さんのこと。今度は私が、鈴さんを暖めてあげる。だから鈴さん、お願い。私を抱いて、女にして。

鈴次郎（と青鬼）　儚！

儚　ああ、鈴さん！

と二人はついに強く抱き合う。

青鬼　そして二人は抱き合い、一つになった。約束通り、儚は水にはならなかった。その代わり、花になった。二人が一つに結ばれたその刹那、儚のカラダはたちまち、たくさんの……たくさんの花びらとなり、空に舞い散った。

その時、たくさんの花びらが舞い散る。
その花の狂乱の中、すべてが闇に包まれ、やがて消えてゆく。

幕